

展 望

現代の学校現場が抱える諸問題

——学校ストレスを中心に——

藤 井 義 久¹

PROBLEMS TROUBLING CLASSROOMS OF MODERN SCHOOLS

——A review of school stress——

Yoshihisa FUJII

This thesis reviews various problems in the practice of today education concentrating on school stress. Although school stress is a remarkable problem for modern children, its studies are actually less in number than those of test anxiety. However, serious studies of the problem began in 1950. When these studies are observed, three subjects can be seen : 1) In the measurement of school stress, attention to three aspects-change of action, emotional change, and physiological change must be given. 2) The relation between school stress score and physiological reactions-heart rate, muscular tension, blood pressure and skin temperature has to be studied. 3) From our observation of school stress, the close study of stress in practical education should be done here after by the analysis of the problems of school bullying, or school refusal.

Key words : school stress, test anxiety, bullying, school refusal.

1. はじめに

最近、「登校拒否」や「いじめ」といった学校現場が抱える深刻な問題が、様々なメディアを通じて盛んに報じられるようになってきた。文部省(1995)の調査によると、「学校嫌い」を理由に年間50日以上欠席した、いわゆる「登校拒否」の児童生徒の比率は、ここ数年確実に伸び続けている。具体的に述べると、1987年当時、登校拒否者数の全児童生徒数に対する比率は、小学校で0.05%、中学校で0.54%であった。ところが、その比率は年々伸び続け、1993年には、小学校で0.13%、中学校で1.01%と、わずか5年余りで倍増の勢いである。

一方、「いじめ」の発生件数は、小学校で減少、中学校で横ばいの傾向が見られる。具体的に述べると、1987年当時、いじめ発生学校数の全公立学校総数に対する

比率は、小学校で18.2%、中学校で29.0%であったが、1993年には、小学校で11.0%、中学校で31.9%となり、特に小学校では減少傾向が見られる。また1校当たりのいじめ発生件数も1987年当時、小学生で0.6件、中学校で1.6件であったが、1993年には小学校で0.3件、中学校で1.2件となり、小学校、中学校とも減少傾向が見られる。しかし、この傾向をそのまま受け入れることはできない。なぜなら「いじめ」は、「登校拒否」と違ってはっきりとした形で両親や教師が認識することが極めて難しい問題だからである。それを裏づける研究として、警察庁(1995)のいじめ調査が挙げられる。それによると、直接いじめを受けた経験があると答えた子供は、小学生で9.0%、中学生で5.7%、また身近にいじめが存在すると答えた子供は、小学生で51.3%、中学生で62.7%にまで達している。さらに、いじめを経験したことのある児童生徒のうち、27.5%は誰にも相談しなかったと答えている。これらのことから、いじ

¹ 東京大学 (University of Tokyo)

めの実態を両親や教師が正確に把握することは極めて難しいことがわかる。それに関連して、最近「いじめ」が原因と考えられる自殺に関する報道をよく目にするようになってきた。警察庁(1995)の調査によると、平成6年度に警察が把握した少年の自殺者数は580人で、最も多かった自殺動機は学校問題に関するもので全体の27.1%を占めていた。この数字は、現代の学校現場が抱えている問題がいかに深刻なものであるかを物語っているといえよう。

安藤(1985)や坂野(1990)は、このような学校生活における様々な児童生徒の逸脱行動を生み出す原因として、児童生徒が学校生活において感じるストレスの増大を挙げている。また、Brown(1954)やAngelino et al.(1956)は、「子供達にとって最もストレスを感じやすい場所は、学校である。」と指摘している。確かに、現代の子供達が通う学校にはストレスとなりうる要因が数多く存在する。「教師との関係」、「友達との関係」、「テスト」や「体罰」など挙げればきりが無い。そのような理由から、Sarason et al.(1960)やHill & Sarason(1966)は、子供達の「学校ストレス」の問題に注目することの必要性を指摘している。そこで、最近になって学校ストレスに関する研究が注目を浴びようになってきた。一般的なストレスに関する研究は、Selye(1958)が「ストレス学説」を発表して以降、数多く行われてきたが、学校現場と密接に結びついた形でのストレス研究は最近まであまり見られなかった。一方、テスト不安研究においては、浜・三根(1980)や藤井(1995)のレビューからも明らかなように、子供達の「ストレス」の問題と関連づけながら、学校現場と密接に結びついた様々な研究が行われてきた。例えばProger et al.(1969)は、毎日テストを受ける子供は、あまりテストを受けない子供よりも有意に高いストレスを感じていることを明らかにした。また、Lekarczyk & Hill(1969)によると、伝統的なテスト状況はゲーム状況と比較して有意にストレスフルであることを明らかにした。これらの研究から、Katz(1968)も述べているように、学業達成場面における子供達のストレスは特に強力なものといえよう。特に井上ら(1975)や田上(1991)も指摘しているように、現在の進学に関する過当競争は子供の心身の健康を阻害していることは明白な事実であると思われる。そのような背景から、テスト不安研究は学校ストレス研究よりも遥かに多く行われてきたのが現状である。しかしながら、Grinker(1966)、Phillips(1978)、Lazarus & Folkman(1984)が述べているように、不安とストレス反応とは強い関連があ

るので、両者の研究成果を切り放して検討するのではなく、両者の研究成果を結びつけて学校が子供達に及ぼす心理的影響について考えていくことが必要だと思われる。なぜなら、Spielberger(1972)も、自ら発表した「状態-特性不安理論」の中で、「外部からの有害な刺激であるストレス刺激を感じることによって迫り来る危険(恐れ)を予知し、その結果として状態不安が上昇する。」と述べているように、ストレスと不安とは密接に関連しあっていると思われるからである。

そこで、本論文では、「学校ストレス研究の現状」のみに焦点を当てるのではなく、「学校ストレス」と関連が強いと思われる「テスト不安」に関する研究も交えながら多角的に現代の学校現場が抱えている問題について考えていくことにしたい。

2. 学校ストレスの定義

「学校ストレス」の定義について考える前に、そのもとなる「ストレス」について過去の研究者がどのような定義をしたかについて見ておくことにする。

「ストレス」という言葉は、もともと物理学用語で、外から加えられた圧力によって物体が歪む状態を指していた。現在のように心理学の分野で「ストレス」という言葉が用いられるようになったのは比較的新しく、1944年までは心理学事典には載っていなかった。従って、ストレス研究は1950年ごろから本格的に始まったといつてよいだろう。

さて、心理学で使われる「ストレス」に関する定義は現在まで様々な存在するが、それらを総合すると大きく「行動的变化」、「情緒的变化」、「生理的变化」という3つの視点から「ストレス」を捉えているように思われる。まずMiller(1953)は、「ストレス」を「脅威であったり、行動に変化を起こすような激しく極端な異常刺激」と定義している。これは、「行動的变化」の視点から成された定義といえる。次に、Lazarus(1966)は、「ストレス」を「個体に不安を引き起こすことが予想される刺激或いは条件を含んでいる状況」と定義した。これは、前述のSpielberger(1972)の「状態-特性不安」の考え方に似ており、「情緒的变化」の視点から成された定義といえる。つまりAiken(1961)も述べているように、「ストレス」と「不安」とは非常に似通った概念で、両者をはっきりと区別することは難しいことを意味している。さらにSelye(1958)は、「ストレス」を「有害な刺激(心理的脅威を含む)に対する身体的防衛の総集した形」と定義した。これは、「生理的变化」の視点から成された定義といえる。またBaum et al.(1982)も、「ストレス」を「生理的变化」の視点から「環

境内の諸々の出来事とか力(ストレッサー)が有機体の生存や良好な状態を脅かしたり, さらには当の有機体がこうした脅威に対して反応するプロセス」と定義している。このように「ストレス」については様々な定義がすでに成されているが, そのどれもが「ストレス」をある1方向から捉えているにすぎない。もともと「ストレス」は, 中野(1995)も述べているように, 生理的・情緒的・認知的・行動的な多次元の反応であるから, ある1方向から「ストレス」を捉えるのは問題であると思われる。もっと多角的に「ストレス」を定義しておくことが必要であるといえよう。このようなことから, Lazarus & Folkman (1984) も述べているように, 今なお研究者の誰もが満足できるような「ストレス」の定義を打ち立てた者はいないのが現状である。

さて, 前述の「ストレス」の定義に比べて, 「学校ストレス」に関する定義は, まだ非常に少ない。そのような状況の中で, Ahrentzen et al. (1982) は, 「学校ストレス」を「子供と学校環境との適合性が十分でないことによって生じる不快感」と定義している。つまり, 彼らは, 子供が学校環境にうまく適応できないと「学校ストレス」が生まれることを指摘している。また, わが国では, 嶋田ら(1992)が, 「学校ストレス」を「児童自身が経験している刺激のうち, 児童がネガティブであると評価したもの」と定義し, さらにそれを「個人的レベル」と「集団的レベル」の2つに分けている。すなわち, 特定の個人によってのみネガティブに評価されるものと, 多くの個人に共通してネガティブに評価されるものとが学校現場に存在することを指摘している。すなわち「いじめ」などは, 特定の個人に対して行われるものであるから「個人レベルの学校ストレス」ということができよう。一方「校則」などはその学校全体の生徒に対して「ストレス」となりうるものであるから「集団レベルの学校ストレス」ということができよう。しかし, 実際問題, 「学校ストレス」を「個人的レベル」か「集団的レベル」かにきちんと分けることは非常に難しいと思われるし, またわざわざそのように区別する必要もないように思われる。そこで, 本論文では, 前述の様々な「ストレス」に関する定義を参考にしながら, 「学校ストレス状況」を「児童・生徒が日常の学校生活において, その場から逃げ出したい状況, 不快や恐れを感じるような状況, 或いは発汗や心拍数の増加といった生理的反応を引き起こさせるような状況」と定義したい。すなわち, 前述の「ストレス」に関する様々な定義を見てわかるように, 過去の研究者が「ストレス」を「行動的变化」, 「情

緒的变化」, 「生理的变化」の3方向から捉えようとしていることから, 「学校ストレス」も同様のアプローチをしていく必要があるように思われる。

3. 質問紙を用いた学校ストレスの測定

子供達の学校ストレスを測定する質問紙は, すでにいくつか開発されているので, 紹介する。

諸外国では, Phillips (1966) が開発した Children's School Questionnaire (CSQ) が有名である。この質問紙は, Test Anxiety Scale for Children (Sarason et al., 1960), The Audience Anxiety Scale (Paivio et al., 1961), The Achievement Anxiety Scale (Stanford et al., 1963), The Defensiveness Scale for Children (Lighthall, 1963), Children's Personality Questionnaire (Porter & Cattell, 1963) から抽出した項目に学業や社会的ストレスに関する項目をつけ加えた198項目で構成され, それぞれの項目に対して「はい」, 「いいえ」の2件法で答える形式を採っている。なお, このCSQを因子分析してみたところ, 「自己主張と自己表現についての恐怖」, 「他者に応える自信の欠如」, 「ストレス耐性と関連のある生理的反応性」, 「テスト不安」という4つの因子を抽出した。一方, Holmes & Rahe (1967) は, 生活上の様々な出来事についてストレスの程度を数値で表わし, それらの出来事が最近どの程度起こったかによって現在のストレスを測定する「社会再適応決定尺度」を開発した。この尺度では, 「配偶者の死」に最も高いストレス度を与えている。そして, その合計値が年間300を越えると, 重大な健康障害を起こす危険性のあることを指摘している。彼らの考え方に従って, Coddington (1972) や, Kanner et al. (1981) は, 生活上の出来事から学校ストレスを測定する尺度を開発している。しかし, これらの尺度は, 転校, 落第といった大きな生活の変化しか取りあげられておらず, 子供達の日々の学校ストレスを測定するにはやや無理があるように思われる。

一方, わが国では, 発達段階に応じた学校ストレス尺度がすでにいくつか開発されている。それらの尺度を見てみると, 神保・山崎(1988)が「子供のストレスは, 情動面の変化, 意識行動面の変化, 身体面の変化として現れる。」と述べているように, 大きく「情緒的变化」, 「行動的变化」, 「生理的变化」という3つの観点から項目が作成されていることに気づく。従って, 学校ストレス尺度項目を見ると, 研究者が子供達の学校ストレスをどのような観点から測定しようとしているのかがよくわかる。そこでここでは, そのような観点から, 過去にわが国で開発された代表的な学校スト

レス尺度について述べていくことにする。

初めに小学生を対象とした学校ストレス尺度について見てみることにする。まず長根(1991)は、「いらいらしたり、胸がドキドキしたり、或いは焦ったりすることがあるか。」といったように、主に子供達の「情緒的变化」の観点から小学生の学校ストレスを測定しようとした。また嶋田ら(1992)も、「情緒的变化」の観点から「いやな気分になったことのある頻度」をもとに小学生の学校ストレスを測定しようとした。そして、これらの小学生版学校ストレス尺度を因子分析してみると、共通して「先生や友達との人間関係」、「学業成績」、「授業中の発表」といった因子が抽出された。一方、後に嶋田ら(1994)が開発した尺度は、前述の尺度と異なって、総合的な観点からストレスを測定しているところに大きな特徴がある。すなわち、この尺度は、「情緒的变化」のみならず、「行動的变化」、「生理的变化」の観点からも項目が作成されている。そして、この尺度を因子分析したところ、「身体的反応」、「抑うつ・不安感情」、「不機嫌・怒り感情」、「無気力」という4つの因子が抽出された。従って、多角的に子供達のストレスを測定したい場合には、この嶋田ら(1994)が開発した尺度が良いといえるが、必ずしも学校場面に限定していないので、学校ストレスに焦点を当てた研究にはやや不向きであるといえよう。

次に中学生を対象とした学校ストレス尺度について見てみることにする。まず岡安ら(1992)は、嫌悪的な出来事経験の頻度をもとに学校ストレスを測定する尺度を開発している。この尺度は、前述の Holmes & Rahe (1967) の「社会再適応決定尺度」によく似ており、因子分析によって「教師との関係」、「友人関係」、「部活動」、「学業」という4つの因子が抽出されている。また岡安ら(1992)は、「情緒的变化」及び「生理的变化」の観点からストレスを測定する尺度を開発している。そして、その尺度を因子分析することによって、嶋田ら(1994)の小学生版学校ストレス尺度と同じような「不機嫌・怒り感情」、「身体的反応」、「抑うつ・不安感情」、「無力的認知・思考」という4つの因子を抽出している。

最後に高校生を対象にした学校ストレス尺度として、坂野ら(1994)が開発した尺度が挙げられる。この尺度は、「情緒的变化」と「行動的变化」の両面から、学校ストレスを測定しており、因子分析によって、「不合理な信念」、「心理的ストレス反応」、「学校適応感」という3つの因子を抽出している。

このように、学校ストレス尺度は、それぞれ異なっ

た観点から項目が作成されているので、算出される学校ストレス得点の持つ意味には十分注意しておく必要がある。例えば、「生理的变化」の観点から測定された学校ストレス得点と「情緒的变化」の観点から測定された学校ストレス得点とは意味的には異なる得点であると考えられる。また、学校ストレスを単一の得点で表わすのは危険で、下位尺度ごとに得点を算出し、プロフィールを描くなどして多角的に個人の学校ストレスの構造を分析することが必要であると思われる。

4. 生理的指標を用いた学校ストレスの測定

さて、人間はストレスを感じると、交感神経が働いて心拍数の増加、血圧の上昇、発汗といった生理的反応の生じることが一般に知られている(桂, 1991)。また Klein (1945), 河野ら (1989), 神保・山崎 (1988) も述べているように、ストレスが増大すると、胃腸系の症状を初めとする様々な生理的反応が一般に生じることがわかっている。これらのことから、学校ストレスと生理的反応とは密接に関連していると思われるが、学校ストレス尺度によって算出される得点と生理的指標との関連性に関する研究は、現在まであまり行われていないのが現状である。テスト不安研究においては、質問紙調査と生理的測定との関連性については従来から様々な研究が行われてきた。そこで、ここでは、Phillips (1978) も述べているように「学校ストレス」と密接な関連があるとされる「テスト不安」に焦点を当て、テスト不安得点と生理的指標との関係について、「ストレス」の問題と関連づけながら見ていくことにする。

一般にストレスがかかりやすいテスト場面では、心拍数や血圧といった生理的指標値も上昇すると言われている。例えば、Bliss, E.L. et al. (1956), Frankenhaeuer (1976), Naliboff et al. (1976) といった研究において、テスト状況に直面すると、生理的反応水準が有意に上昇することを確認している。また、Deffenbacher (1986) は、テスト中、高テスト不安児は低テスト不安児よりも生理的指標の1つである心拍数が高くなることを明らかにしている。さらに、Fujii (1993) は、テスト中に継続して心拍数及び血圧を計測したところ、テスト不安得点の高い子は、テスト中、それらの生理的指標は上昇し続けるのに対して、逆に低い子は下がり続ける傾向のあることがわかった。しかし、ストレスがあまりかからないゲーム状況時にはそのような傾向は見られなかった。このように、ストレスは子供達の生理的反応と密接に関連しあっていると思われる。Mandler & Kremen (1958) によると、現在一般に使用されている生理的反応の指標は、心拍、筋肉緊張、皮

膚温度、血圧の4つである。そこで、次に、それらの生理的指標と質問紙によって測定されるテスト不安得点との関連性に関する研究を見てみることにする。

まず心拍とテスト不安得点との関係であるが、Darley & Katz (1973) によると、小学生においてはゲームの時よりもテストの時に心拍数が多いが、テスト不安得点との相関は見られないことを明らかにしている。同様に Morris & Liebert (1970) も、心拍数とテスト不安得点との間には関連性がないことを確かめている。さらに、Holrayd et al. (1978) や Engel (1972) は、テスト中における心拍数と状態不安得点との間にも有意な相関が見られないことを報告している。次に筋肉緊張とテスト不安得点との関係であるが、Bistline et al. (1976) によると、筋肉緊張は評価ストレスに反応して増加するが、これらの増加は Test Anxiety Scale (TAS) 得点と関連がないことを報告している。また、皮膚温度とテスト不安得点の関係についても、Pasdolf & Jamieson (1978) によると、関連がないことを報告している。

これらの研究結果から判断して、テスト不安研究においては、質問紙によるテスト不安得点と生理的指標との関連性は殆どないと思われる。他に Candland (1977), Holroyd et al. (1978), Hollandsworth et al. (1979), Deffenbacher & Hazaleius (1980) といった多くの研究においても、同様に「テスト不安得点と生理的反応との関連性は存在しない。」と結論づけている。これは、ある意味で当然の結果といえる。つまり、質問紙によるテスト不安得点は、比較的安定した個人のパーソナリティを表わしているのに対して、生理的指標はその時点における心の状態を示しており、その数値は時間とともに変化するのが普通で、両者の相関を採ること自体無理があるといえよう。特に、生理的指標は周りの環境に大きく影響を受ける可能性が高いので、測定時期や場所には細心の注意を払うことが必要と思われる。また、Mandler & Kremen (1958) は、心拍、発汗、体温、呼吸、胃感覚、皮膚緊張、顔面赤面という7つのテスト中における身体変化に関する項目で構成された Autonomic Perception Questionnaire (APQ) を開発した。その質問紙によって測定される生理的指標得点と実際の生理的反応との相関は0.22と極めて小さい値を示していた。要するに、これらの研究から、質問紙によって生理的反応を測定することは難しいといえよう。

さて、ストレスが過大になると心身症を引き出すことが一般に知られている。Sifneos (1977) は、「心身症

の患者には、共通してアレキシサイミア (失感情症) 傾向が見られる。」と述べている。つまり、心身症の患者は、自己の感情への気づきが悪く、感情の言語化が乏しいために、身体症状をはげ口としてストレスの処理が行われる結果、様々な病気を生じさせていると考えられる。従って、そのような人々に対して、現在の自覚症状に関する項目から構成されている質問紙のみによって、「ストレス」を測定することは危険であると思われる。つまり質問紙で「全くストレスがない。」と判断された場合、本当に「ストレス」がたまっていないのか、或いは「ストレス」を感じる機能がうまく働いていないのかを見極めておく必要がある。そういったことから、子供達のストレス水準は、単にストレス検査のみによって判断するのではなくて、心身症診断で用いられるアレキシサイミアスケールや前述の生理的指標による測定結果を併せて、総合的に分析していくことが必要であるように思われる。今後、学校ストレス研究においても、学校場面ごとの生理的指標の変化、生理的指標と質問紙による学校ストレス得点との関連性を明らかにし、子供達を心身症から守る手だてを早急に講じておくことが大切であろう。

5. 学校ストレスの原因

Freud (1949) によると、ストレスを生み出す原因として「欲求不満」、「葛藤」、「恐れ」、「身体的成長過程」の4つを挙げている。また、Klein & Lindemann (1961) は、「重要な関係の欠如或いは欠如することの恐れがあるような状況」、「対人場面で人に出会う状況」、「社会的地位や役割関係に変化が生じるような状況」においてストレスが生まれるとしている。一方、Erikson (1950) は、8つの発達課題が達成されないと、強いストレスを感じるようになるとしている。特に、学齢期の子供は、学校において「勤勉さ」という発達課題が獲得されないと、社会の競争に勝てないばかりでなく、劣等感を持つようになることを指摘している。また Phillips (1978) も、個人の学校経験が子供達のストレス水準に大きな影響を与えていることを明らかにしている。つまり学校環境が、後の子供達の性格特性に大きな影響を与えていると思われるので、学校ストレスの原因を探っておくことは、非常に大切なことであると思われる。

さて、学校ストレスの原因に関する先行研究には、大きく2つの流れがある。まず第1の流れは、「学校環境」の観点から学校ストレスを生み出す原因について追求した研究である。ここでは、特に教師の子供達に対する態度の観点から盛んに研究が行われている。例

えば, Nicholson (1958), Sarason (1961), Denny (1966), Spielberger & Smith (1966) によると, 教師が成績重視の教育を行うことは, 子供達の学校ストレス水準を大いに高める原因になっていることを明らかにしている。また, テスト不安研究においても, 教師の否定的な評価は, 子供達のテスト不安水準を高める大きな要因になっていることを確かめている (Cox, 1968; Shelton & Hill, 1969; Kazma, 1970)。また, Hill (1972) は, 「テスト不安は初期の学校生活における評価経験に対する反応の結果生じる。」と述べ, 教師の評価が子供達に及ぼす影響の重大さを指摘している。また, 教師自身の不安水準が生徒のテスト不安に影響を与えているという Doyal & Forsyth (1973) の研究もある。このように, 学校における教師の態度は少なからず子供達の学校ストレス及びテスト不安水準に影響を及ぼしていることが過去の研究から明らかになっている。また, 現在学校現場で問題となっている「いじめ」も, 「学校ストレス」と密接に関連していると思われる。例えば田村 (1995) は, いじめられ経験によって, 子供達が本来持っている精神的な健康が損なわれて, 慢性ストレスの1つの症状とされる抑うつ傾向が高まることを指摘している。また, Bandura (1973) は, 人間がストレス状況に陥ると, 他人に対して暴力などの攻撃反応を示すようになることを明らかにしている。さらに嶋田 (1995) は, 「友人関係」にかかわるストレスは, 「抑うつ・不安」を中心に殆どすべてのストレス反応に影響しており, 友人関係をめぐるトラブルは学校ストレスを生み出す大きな要因になっていることを指摘している。これらの研究から, いじめられる側もいじめる側も何らかの「ストレス」を感じていることがわかる。まさに「いじめ」は「学校ストレス」と密接に結びついた現象といえよう。今後は, 学校環境の人的要因のみならず, 物理的要因に焦点を当てた研究が望まれるところである。すなわち, 学校立地 (例: 家庭と学校との距離), 学校の空間配置 (例: 多様な施設), 教室環境 (例: 規模, オープンスペース) と子供達の学校ストレス水準との関連性について明らかにしておくことが必要である。

第2の流れは, 「失敗経験」の観点から学校ストレスを生み出す原因について追求した研究である。Hall & Lindzey (1957) によると, 「自己の存在を脅かす経験は, ストレスフルで恐れとして認識される。」と述べている。この自己の存在を脅かす経験は様々考えられるが, 最もストレスを感じやすいのは失敗経験であろう。特に過去の学業達成場面等における失敗経験が学校ストレスを生み出す大きな原因となっていることが, い

くつかの研究 (Gordon & Berlyne, 1954; Marlett & Watson, 1968; Finch, Kendall, Montgomery & Morria, 1975) において明らかにされている。同様にテスト不安研究においても, 失敗経験は子供達のテスト不安水準を高める原因となっていることが明らかにされている。例えば, Bradshaw & Gaudry (1968) は, 失敗経験をした子供達は成功経験をした子供達よりもテスト不安得点有意に高いことを確かめている。また Covington et al. (1986) も, 子供達のテスト不安水準と子供達の有能感や自己価値感を減少させる失敗経験との関連性を指摘している。同様に Dweck (1976) も, 「高テスト不安児は, 一般に過去に失敗経験が多いために失敗及び批判回避動機が強い。」と述べている。一方, Katchmar et al. (1958) によると, 失敗経験は, 高テスト不安児においては課題に対する有能感を減少させるけれども, 低テスト不安児にとっては逆に成績向上の原動力になることを明らかにしている。彼らの研究結果は, 失敗経験は, 高テスト不安児にはマイナスの効果をもたらすけれども, 逆に低テスト不安児にとってはプラスの効果をもたらすことを意味しており, 大変興味深い研究結果である。同様に, Mandler & Sarason (1952) によると, 人の失敗の経験は, 低テスト不安児よりも高テスト不安児の成績において重要な変数になっていることを明らかにした。一方, スポーツ不安研究においても, Coddington & Trowell (1980) が, 「最近否定的な生活の出来事を経験したフットボールプレーヤーは, グラウンドで重大な怪我をする傾向がある。」と述べている。これらの研究から, 失敗経験は, 子供達の学校ストレス水準を高める大きな原因になっているように思われる。今後は現在問題となっている「いじめ」と学校ストレスとの関連性等についても詳細に検討しておく必要がある。

以上, 内外の学校ストレス研究の現状を見てきて, この種の研究はようやく軌道に乗ったばかりで, テスト不安研究と比較して必ずしも過去に行われた研究は多くないのが現状である。しかし, 「学校ストレス」の視点から, 「いじめ」や「登校拒否」といった現代の学校現場が抱えている様々な問題を見つめておくことは, 今後の学校教育の在り方について考えていく上で非常に重要であるといえよう。つまり子供達の学校ストレスを低減させるためには, 家庭, 学校, 地域が何をなすべきかを解明することは, 「いじめ」や「登校拒否」を生み出さない環境作りにつながると思われるからである。今後, 学校現場と密接に関連した様々な学校ストレス研究が望まれるところである。

引用文献

- Ahrentzen, S., Jue, G.M., Skorpanich, M.A., & Evans, G.W. 1982 School environments and stress. Evans, G.W. (ed.) *Environmental stress*, Cambridge University Press, Pp. 224—255.
- Aiken, L.R. 1961 Stress and anxiety as homomorphisms. *Psychological record*, **11**, 365—372.
- Angelino, H., Dollin, J., & Mech, E.V. 1956 Trends in the “fears and worries” of school children as related to socio-economic status and age. *Journal of Genetic Psychology*, **89**, 263—276.
- 安藤延男 1985 学校社会のストレス(学校ストレスを考える第5巻) 垣内出版
- Bandura, A. 1973 Social learning theory of aggression. J.F. Knutson (ed.) *In the control of aggression*, Chicago : Aldine.
- Baum, A., Singer, J.E., & Baum, C.S. 1982 Stress and the environment. Evans, G.W. (ed.) *Environmental Stress* (Pp.15—44). Cambridge University Press.
- Bistline, J., Shanahan, F., & Joremko, M. 1976 An analogue study of the cognitive, psychological and behavioral components of test anxiety. University of Richmond.
- Bliss, E.L., Migiton, C.J., Branch, C.H., & Samuels, L.T. 1956 Reaction the adrenal cortex to emotional stress. *Psychosomatic Medicine*, **18**, 56—76.
- Bradshaw, G.D., & Gaudry, E. 1968 The effect of a single experience of success of failure on test anxiety. *Australian Journal of Psychology*, **20**, 219—223.
- Brown, R.L. 1954 These high school fears and satisfactions. *Understanding the Child*, **23**, 74—76.
- Candland, D.K. 1977 The persistent problem of emotion. In D.K. Candland, J.P., Fell, E., Keen, A.I. & R.M. Tarpay (Eds.) *Emotion*, Monterey, Calif : Brooks / Cole.
- Coddington, R.D. 1972 The significance of life events as etiologic factors in the diseases of children. *Journal of Psychosomatic Research*, **16**, 7—18.
- Coddington, R.D., & Trowell, J.R. 1980 The effect of emotional factors on football injury rates—a pilot study. *Journal of Human Stress*, **6**, 3—5
- Covington, M.V., Omelich, C.L., & Schwarzer, R. 1986 Anxiety, aspirations and self-concept in the achievement process : A logitudinal model with latent variables. *Motivation and Emotion*, **10**, 71—88.
- Cox, F.N. 1968 Some relationship between test anxiety, presence or absence of male persons and boy's performance on a repetitive motor task. *Journal of Experimental Child Psychology*, **6**, 1—12.
- Darley, S.A., & Katz, I. 1973 Heart rate changes in children as a function of test versus game instructions and test anxiety. *Child Development*, **44**, 784—789.
- Deffenbacher, J.L. 1986 Cognitive and physiological components of test anxiety in real-life exams. *Cognitive Therapy and Research*, **10**, 281—292.
- Deffenbacher, J.L., & Hazaleus 1980 Cognitive, emotional, and physiological components of test anxiety. *Cognitive Therapy and Research*, **9**, 169—180.
- Denny, J.P. 1966 Effects of anxiety and intelligence an concept formation. *Journal of Experimental Psychology*, **72**, 596—602.
- Doyal, G.T., & Forsyth, R.A. 1973 The relationship between teacher and student anxiety levels. *Psychology in the Schools*, **10**, 231—233.
- Dweck, C.S. 1976 Childrens interpretation of evaluative feedback : The effect of social cues on learned helplessness. *Merrill-Palmer Quarterly*, **22**, 105—109.
- Engel, B.T. 1972 Response specificity. In N.S. Greenfield & R.A. Sternbach (Eds.) *Handbook of psychology*. New York : Holt, Rinehart & Winston.
- Erikson, E.H. 1950 *Childhood and society*. New York : Norton.
- Finch, A.J., Kendall, P.C., Montgomery, L.E., & Morris, T. 1975 Effects of two types of failure on anxiety. *Journal of Abnormal Psychol-*

- ogy, **84**, 583—585.
- Frankenhaeuser, M. 1976 The role of peripheral catecholamines in adaption to understimulation and overstimulation. In G. Sarason (Ed.), *Psychopathology of Human Adaption*. New York : Plenum Press.
- Freud, A. 1949 An outline of psychoanalysis. New York : Norton.
- Fujii, Y. 1993 Relationship between test anxiety and physiological reactions. 国際健康心理学会議発表論文集, 149.
- 藤井義久 1995 テスト不安研究の動向と課題 教育心理学研究, **43**, 455—463.
- Gordon, W.M., & Berlyne, D.B. 1954 Drive-level and flexibility in paired associate nonsense syllable learning. *Quarterley Journal of Experimental Psychology*, **6**, 181—185.
- Grinker, R.R. 1966 The psychosomatic aspects of anxiety. In C.D. Spielberger (Ed.), *Anxiety and behavior*. New York : Academic Press.
- Hall, C.S., & Lindzey, G. 1951 Theories of personality. New York, Wiley.
- 浜 治世・三根 浩 1980 テスト不安研究の展望 心理学評論, **23**, 295—319.
- Hill K.T. 1972 Anxiety in the evaluative context. In W. Hartup (Ed.) *The young child* (vol. 2). Washington, D.C., National Association for the Educational of Young Children.
- Hill, K., & Sarason, S.B. 1966 A further longitudinal study of the relation of test anxiety and defensiveness to test and school performance over the elementary school years. *Child Development Monographs*, **31**, 1—76.
- Hollandworth, J. Gx. Jr, Glazeski, R.C., Karkland, K., Jones, G.E., & Van Norman, L.R. 1979 An analysis of the nature and effects of test anxiety : cognitive, behavioral and physiological components. *Cognitive Therapy and Research*, **3**, 165—180.
- Holmes, T.H., & Rahe, R.H. 1967 The social readjustment rating scale. *Journal for Psychosomatic Research*, **11**, 213—219.
- Holroyd, K.A., Westbrook, T., Wolf, M., & Badhorn, E. 1978 Performance, cognition, and physiological responding in test anxiety. *Journal of Abnormal Psychology*, **87**, 442—451.
- 井上健治・上野一彦・野口裕之 1975 大学受験と高校生活(1) 東京大学教育学部紀要, **15**, 103—129.
- Kanner, A.D., Coyne, J.C., Schaefer, C., & Lazarus, R.S. 1981 Comparisons of two modes of stress measurement : Daily hassles and uplifts versus major life events. *Journal of Behavioral Medicine*, **4**, 1—39.
- Katchmar, L.T., Ross, S., & Andrews, T.G. 1958 Effects of stress and anxiety on performance of a complex verbal-coding task. *Journal of Experimental Psychology*, **55**, 599—663.
- 桂 載作 1991 医療心理のための心身医学—こころと体の科学 医薬ジャーナル社
- Katz, I. 1968 Academic motivation and equal educational opportunity. *Harvard Educational Review*, **38**, 57—65.
- Kazma, A. 1970 The effect of anxiety, stimulation and isolation on social reinforcer effectiveness. *Journal of Experimental Child Psychology*, **8**, 1—8.
- Klein, D.C., & Lindemann, E. 1961 Preventive intervention in individual and family crisis situations. In G. Caplan (Ed.), *Prevention of mental disorders in children*. New York : Basic Books.
- 警察庁 1995 警察白書(平成7年度版) 大蔵省印刷局
- 河野友信・曾根睦子・坂本洋子(編) 1989 新しい学校保健—児童生徒のからだの健康科学— 朝倉書店
- Lazarus, R.S. 1966 Psychological stress and the coping process. New York : McGraw-hill.
- Lazarus, R.S., & Folkman, S. 1984 Stress, appraisal, and coping. New York : Springer Publishing Company.
- Lekarczyk, D.T., & Hill, K.T. 1969 Self-esteem, test anxiety stress, and verbal learning. *Developmental Psychology*, **1**, 147—154.
- Lighthall, F. 1963 Defensive and non-defensive changes in children's responses to personality questionnaires. *Child Development*, **34**, 455—470.
- Mandler, G., & Kremen, J. 1958 Autonomic feedback : A correlational study. *Journal of Personality*, **26**, 388—399.

- Mandler, G., & Sarason, I.G. 1952 The effects of prior experience and subjective failure on the evocation. *Journal of Personality*, 21, 336—341.
- Marlett, N.J., & Watson, D. 1968 Test anxiety and immediate or delayed feedback in a test-like avoidance task. *Journal of Personality and Social Psychology*, 8, 200—203.
- Miller, N.E. 1953 Same reflections on the law of effect produce a new alternative to drive reduction, Lincoln, Neb. : University of Nebraska Press.
- 文部省 1995 学校基本調査(平成6年度) 大蔵省印刷局
- Morris, L.W., & Liebert, R.M. 1970 Relationship of cognitive and emotional components of test anxiety to physiological arousal and academic performance. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 35, 332—337.
- 長根光男 1991 学校生活における児童の心理的ストレスの分析—小学4, 5, 6年生を対象にして 教育心理学研究, 39, 182—185.
- 中野良顕 1995 学校ストレスとは 指導と評価, 41, 11, 6—11.
- Naliboff, B.D., Rickles, W.H., Cohen, M.J., & Naimark, R.S. 1976 Interactions of marijuana and induced stress : Forearm blood flow, heart rate and skin conductance. *Psychophysiology*, 13, 517—522.
- Nicholson, W.M. 1958 The influence of anxiety upon learning : Interference or drive increment? *Journal of Personality*, 26, 303—319.
- 岡安孝広・嶋田洋徳・丹羽洋子・森 俊夫・矢富直美 1992 中学生の学校ストレスの評価とストレス反応との関連 心理学研究, 63, 310—318.
- 岡安孝広・嶋田洋徳・坂野雄二 1992 中学生用ストレス反応尺度の作成の試み 早稲田大学人間科学研究, 5, 23—29.
- Paivio, A., Baldwin, A., & Berger, A. 1961 A measurement of children's sensitivity to audiances. *Child Development*, 32, 721—730.
- Pasdolf, J.M., & Jamieson, J.H. 1978 Asymmetric finger temperature response to test anxiety imagery. University of Michigan.
- Phillips, B.N. 1966 An analysis of causes of anxiety among children in school. (Final Rep., Proj. No. 2616, U.S.O.E. Cooperative Research Branch) Austin, Texas : University of Texas.
- Phillips, B.N. 1978 School stress and anxiety. New York : Human Sciences Press.
- Porter, R.B., & Cattell, R.B. 1963 *The Children's Personality Questionnaire*. Champaign, Ill : Institute of Personality & Abilities Testing.
- Proger, B., Mann, L., Taylor, R.C., & Morrell, J. 1969 The relationship between frequency of testing, arithmetic achievement, and induced test anxiety in sixth grade students. Paper presented at the annual meeting of the American Educational Research Association, Los Angeles.
- 坂野雄二 1990 登校拒否・不登校 同朋社
- 坂野雄二・嶋田洋徳・三浦正恵・森 治子・小田美穂子・猿渡末治 1994 高校生の認知的個人差が心理的ストレスに及ぼす影響 早稲田大学人間科学研究, 7, 75—90.
- Sarason, S.B., Davidson, K., Lighthall, F., & Waite, R.R., & Ruebush, B.K. 1960 Anxiety in elementary school children, New York : Wiley.
- Sarason, I.G. 1961 Characteristics of three measures of anxiety. *Journal of Clinical Psychology*, 17, 196—197.
- Sarason, S.B., Davidson, K.S., Lighthall, F.F., Waite, R.R., & Ruebush, B.K. 1960 Anxiety in elementary school children. New York : Wiley.
- Selye, E. 1958 *The Stress of Life*. McGraw-hill, New York.
- Shelton, J., & Hill, J.P. 1969 Effects on cheating of achievement anxiety and knowledge of peer performance. *Developmental Psychology*, 1, 449—455.
- Sifneos, P.T. 1977 The prevalence of alexithymics characteristics in psychosomatic patient. *Psychother. Psychosom.*, 28, 199—206.
- 嶋田洋徳 1995 小学生のストレス 指導と評価, 41, 11, 12—16.
- 嶋田洋徳・岡安孝弘・坂野雄二 1992 児童の心理的ストレスと学習意欲との関連 健康心理学研究, 5, 7—19.
- 嶋田洋徳・戸ヶ崎康子・坂野雄二 1994 小学生用ス

- トレス反応尺度の開発 健康心理学研究, 7, 2, 46—58.
- Spielberger, C.D. 1972 Anxiety : Current trends in theory and research. vol. 2. New York : Academic Press.
- Spielberger, C.D., & Smith, L.H. 1966 Anxiety, stress, and serial-position effects in serial-verbal learning. *Journal of Experimental Psychology*, 72, 589—595.
- Stanford, D., Dember, W., & Stanford, L. 1963 A children's form of the Alpert-Haber achievement anxiety scale. *Child Development*, 34, 1027—1032.
- 田上不二夫 1991 疲れた子どもの心—その症状と対応策— 児童心理, 6, 851—857.
- 田村 毅 1995 子どもの抑うつ状態の社会医学的視点 河合(編) 子どもの精神障害 こころの科学, No. 62, Pp. 30—37.
- 神保信一・山崎久美子 1988 登校拒否の現況と今日的視点 神保・山崎(編) 学校にいけない子供たち 現代のエスプリ, 250, Pp. 9—21.
- (1996.6.11 受稿, 12.16 受理)